



東北と世界が繋がった一週間 ～映像で振り返る東北の10年～

(一財)自治体国際化協会ニューヨーク事務所 元所長補佐 藤原 智子 (長野県派遣)

イベント開催に込めた想い

2021年3月11日。東日本大震災から10年が経過するそのタイミングで、ニューヨークの地からできることはないか。そんな想いがきっかけとなり、JETプログラム経験者が関わってきた震災のドキュメンタリー作品をオンラインで上映するに至りました。

オンラインであれば世界中のどこにいても、東北のこれまでの歩みを知り、未来を語り合うことができます。そして各自ができることを考えるきっかけにすべくこの企画がスタートし、日本にいるJETプログラム経験者や作品の監督にも協力を仰ぎ、実行委員会形式で企画を進めていきました。

実施内容

3月5日から11日にかけて、6つのドキュメンタリー作品の上映と3つのテーマのパネルディスカッションを行いました。

ドキュメンタリー作品の上映

各作品の上映後には、監督とのライブQ & Aセッション

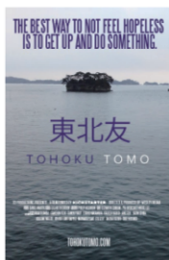
ンを行い、参加者が監督に直接質問できるインタラクティブな時間の設計を意識しました。さらに北米在住のJETプログラム経験者5名がモデレーターとして監督との掛け合いをサポートしてくれました。参加者からは「作品の中に収めきれなかったストーリーについて聞かせてほしい」「取材した東北の人たちは今どうしているのか」といった質問が寄せられました。

一パネルディスカッション

- ・ 姉妹都市交流 ～陸前高田市とカリフォルニア州クレセントシティを例に～
- ・ 日本の食文化と健康
- ・ これまでの歩みと東北の未来

という3つのテーマでパネルディスカッションを実施しました。JETプログラム関係者だけでなく、大学生から議員、学識経験者、そして陸前高田市職員まで多様な顔ぶれのパネリストにご登壇いただきました。

「姉妹都市交流」のパネルディスカッションでは、津波で流された高校の実習船が流れ着いたことを契機に、初めは高校生の交流からスタートした関係が、今はビジネスや教員の交流に発展した事例が紹介されました。具



Tohoku Tomo
東北友 (2014年)
監督 Wesley Julian

Wesley監督はJETアラムナイ。東北で復興支援に関わる国際色豊かなコミュニティ・団体の姿が描かれている



Pray For Japan
(2012年)
監督 Stu Levy

被災地で困難に直面しながらも、それを乗り越えようと闘う人々の姿を描いたストーリー



113 Project
(2015年)
監督 Wesley Julian

JETアラムナイWesley監督が東北で復興支援に関わるJETや現地の人々を描いたショートムービー



Nourishing Japan
(2020年)
監督 Alexis Agliano Sanborn

JETアラムナイAlexis監督が震災後の給食再開の様子を含め日本の給食や食育文化を描く



LIVE YOUR DREAM
(2013年)
監督 Regge Life

石巻市でALTをしていたティラーアンダーソンさんの生涯



Life Goes On
一陽来復
(2017年)
監督 Mia Yoon

ティラーさんのご遺族と被災地の家族との交流のほか、悲しみを乗り越えて生きる人々のストーリー

上映作品一覧

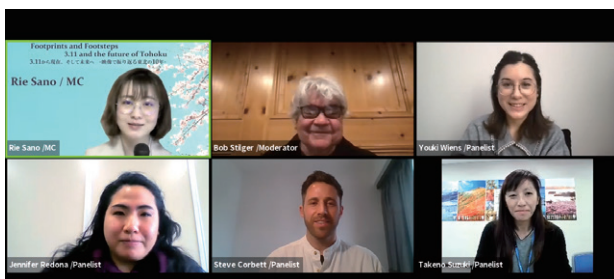


モデレーター、パネリスト一覧

体的には陸前高田産の塩を使ってクレセントシティのチーズ会社が商品開発を行ったり、特別支援教育をテーマに教員が学びを共有するなど、今後も連携の可能性がさらに広がっていく様子が見て取れました。

「日本の食文化と健康」では、山形県鶴岡市の給食や食育をきっかけとして、アメリカの学校給食システムとの比較、震災やパンデミックなどの危機が映し出すコミュニティのレジリエンスや食産業を取り巻く課題など幅広い観点から議論を行いました。また、被災後にコミュニティを巻き込み、発酵食品に焦点を当てた新たな施設をオープンした食品メーカーの事例など、東北の食が持つ可能性を信じて前に進む姿を知ることができました。

「これまでの歩みと東北の未来」では、前半に東北3県の国際交流員から10年間の復興の歩みや各県の魅力、観光情報の紹介をしてもらいました。後半では各パネリストが震災を契機に自分の価値観がどう変わったか、東北での勤務を始めてから感じたことなどを共有し、彼らから見た東北の人の強さと温かさについて語りました。



パネルディスカッションの様子

また、遠く離れた地からでもできる支援のひとつとして、各県の情報発信サイトの案内に加え、JETプログラム経験者が共同創業者である Koko Care Packages から特別に発売いただいた”食べて応援”できる東北産品セットを参加者にご紹介しました。



そのほか、富田駐米大使や岩手、宮城、福島各県知事そして石巻市長からも当イベントに向けて温かいメッセージをいただきました。

ご協力いただいた監督やパネリスト、モデレーター、MCはアメリカ・カナダ各地、日本、そしてヨーロッパにまで広がりました。

イベントの成果

チケット発券数は約1,500枚に達し、国別ではアメリカの66%に続いて日本が20%、カナダが8%、そのほかシンガポールや英国、フランス、フィンランド、イタリア、南アフリカ、メキシコなど合計16か国から参加いただきました。

さまざまな方にご協力をいただいたことで、世界の人と東北の10年間の歩みを見つめ、東北や日本が持つポテンシャルを知り、未来を語り合うという今回の目的を達成することができたと思います。

当初想定していなかった収穫としては、コロナ禍でなかなか人脈を広げるのが難しい中、今回のイベントではMCやパネリストの発掘と交渉、監督との連携などの調整を通じて、新しい人脈の開拓につながったことです。

皆さんの地域を第二のふるさとだと思っている外国人はJETプログラム経験者をはじめ、世界各地にきっといます。オンラインでの参加なら協力してもらいやすく、交通費もかかりません。パンデミックの危機をチャンスと捉えて、つながりを広げるきっかけにしていきたいものです。